

本号のテーマ : 「コスモスプラン応援歌」

○ はじめに

1年前、平成30年4月号で、自分づくりの根っこになる取り組みとして本市が大事にしている「コスモスプラン」について、そのPRをさせていただきました。今回、31年度の出発にあたり、改めて同PRの続編を綴ることといたしました。

多くの皆さんがご案内かと思いますが、作家で日本ペンクラブ会長もされている吉岡忍氏は我が佐久市のご出身で、後述の『文集佐久』へのご寄稿、また、「我がまち佐久市民講座」でのご講演などもいただいております。本号では、同文集への氏の特別寄稿が、コスモスプランへの大応援歌にもなると考え、その一部を紹介させていただきますが、改めて「読むこと・書くこと・行うこと」の重要性を認識する機会としていただければ幸いです。

○ 『文集佐久』への特別寄稿から

この文集は、佐久市PTA親子文庫が編集しておりますが、平成29年度発行の第34号に吉岡氏の特別寄稿が載りました。抜粋での紹介となってしまいますが、お許しください。

氏は、「読むことと書くことの距離を縮める」と題して、ご自身の実践を紹介されながら、読書の意義について大変興味深い論を展開しておられます。私は、あっという間にその「吉岡ワールド」に引き込まれてしまいました。

～早くも最初のページで、私をくぎ付けにしたのが次の部分です。～

◇ 文学作品を例にするとわかりやすいのだが、作者や主人公が物語のクライマックスで語っているところに線を引き、書き抜いて、そこをもう一度読んでみたところで、読書のさなかにハラハラ、ドキドキ、ジーンとしたあの感動はいつこうに湧いてこない。何だか冷めた湯豆腐を食べているような感じなのだ。

～こう言い切られた後に、こんな具体例が添えられます。～

◇ 野に咲くリンドウの描写があって、「たぐさんのリンドウがいっせいに目を覚まし、欠伸をした」と書いてある。(略)「リンドウが美しく咲いた」と書かれていただけなら私はそこを読み飛ばしたに違いない。

～そして、一般化が進みます。～

◇ 本を読んで、どんな言いまわしや表現にハッとするかを見ていくと、自分というものがよくわかるのである。

文章を書く仕事を始めたころ、私は手当たり次第に本を読み、気に入った言いまわしや表現をノートに書き写していった。小説からも、哲学書からも、マンガからも、科学や歴史の本からも書き抜いた。一行のこともあれば、二、三十行に及ぶこともあったが、その書き抜きが千、二千になったものを読み直したとき、私はびっくりした。私自身もよくわかっていなかった好み、お気に入り、ものの感じ方と考え方のクセが、そこからはっきりと立ち上がってきたからである。

～続いて、読書というものがテレビなどと異なる特徴に言及されます。～

◇ 読書は読み手を刺激し、その想像世界を広げるだけでなく、私も書いてみたい、という気を起こさせる。じつはここが、立ち話やメールとも、テレビや音楽や映画とも違う、本を読むという経験に独特の特徴ではないだろうか。

～そして結びとなります。～

◇ 読書とは、まさに書き手と読み手のあいだで交わされる意志や思考や感情のやりとり、無言の対話の場なのである。読んで面白かった、感動した、ためになった、あるいは、つまらなかった、期待外れだった、というだけでなく、そこには機微にわたるさまざまな交換がある。もしそこに、自分の思いや考えを自由に書き表せる技術があつたら、読み手は直ちに書き手になるだろう。この自在な入れ替わりも、読書ならではの。

読むことは、書くことである。書くことは、読むことである。二つの距離を縮め、自由に往來することが、私たちの日常と人生を豊かにする最初の一步ではないだろうか。

(以上文責 糊澤)

○ おわりに

偉大なる教育者の東井義雄先生は「根を養えば樹は自ずから育つ」と名言を残されています。本市のコスモスプランは、その根を、「読むこと・書くこと・行うこと」の実践で養いましょうと呼びかけています。

この3つの実践は、『佐久の先人』としてもご紹介している丸岡秀子氏が大事にされたものであり、稲荷山公園にある氏の偲慕碑にも刻まれております。これを核として、前土屋教育長さんのもとコスモスプランとして練り上げられ、それが平成22年1月7日、柳田市長の新春記者会見にて産声を上げたのです。

本号では、ふるさと佐久が生んだ日本を代表する作家吉岡忍氏の説かれるところを紹介いたしましたが、それは明治36年生まれの丸岡氏の生きざまとも呼応し、そこから誕生したコスモスプランを一段と輝かせてくれたように思います。

そんな吉岡説と出会い、私は熱々の「湯豆腐」を味わった感を覚えました。